

# 蛇つかひ

鈴木三重吉

青空文庫



インドだのエジプトだのといふやうな熱帯地方へいきますと、  
 蛇へびつかひ使つかひと言つて蛇にいろ／＼のことをさせて見せる、わたり歩  
 きの見世物師がゐます。たいてい五六人で組をつくつて、ありと  
 あらゆるさま／＼の蛇のはいつた、籠かごや袋や箱をかついで、町  
 から町へとめぐつて歩き、人どほりのおほい広場や空地で、人を  
 あつめて見せるのです。人がいゝかげんにあつまりますと、蛇つ  
 かひはいづれも地びたにすわつたまゝで、中の二三人が、タンブ  
 ーリンといふ、鈴のついた手太鼓をポン／＼チャリン／＼となら  
 し出します。それと一しよに、ほかの二人は、へんな薬の草を口  
 へ一ぱい入れこんで、ふう／＼と、あたり一面へ、薄荷はくかのやうな

きついにほひのする烟けむりをはき出します。

そのうちに蛇つかひたちは、袋や籠かごをあけて蛇をとり出します。すると蛇は、たちまちしつぽの方でからだをさゝへて立ち上り、によるくと上体をゆすぶりながら、タンブーリンの音ねに合はせて、にじり歩いてをどります。見物人は、それを見ると、はつはとよろこんで、お金をなげていくのです。

しかし、それらの蛇使は、そんなをどりを見せるばかりでなく、ときによると人の家うちへ出かけて戸口や窓をくんく〜鼻でかぎまはしたあげく、このお家うちには蛇があるなどと言ひふらします。すると、家うちの人は気味がわるくなつて、では、どうぞつかまへていつてくれると言ひます。そこで蛇つかひは、またタンブーリンをたゝ

き、れいの薄荷のやうなほひのする烟をもうくと立て、シツ／＼シツ／＼と言つて、おびき出しますと、ふしぎにも、家の中にかくれてゐた蛇が、すぐによろ／＼とはひ出して来ます。蛇つかひはそれをつかまへてお金をもらひ、とつた蛇も袋に入れてもつていくといふやうなこともします。

或<sup>ある</sup>ときアフリカのカイローといふ町に、さういふ蛇使で顔の売れた、アブト・エル・ケリムといふ男がゐました。そのケリムが、或日その町のフランスの領事館のそばをとほりかゝりました。そしてふと立ちどまつて、その建物の入口をじろ／＼のぞいたり、窓を見上げたりして、しきりにくびをひねつてゐました。領事館の小使がそれを見て、どうしたのだと聞きますと、ケリムは、い

やたいへんだ、この家うちの中には大きな毒蛇がどつさり住んでゐると言ひました。小使はびつくりしてそのことを領事のデラポールトに話しました。

デラポールトは、もうそこにかなり永く住んでゐるのですが、これまでそこいらでむかでや、さそりといふ毒虫を見つけたことはありましたが、まだ毒蛇は、小さいのをすら、一ぴきも見たことがありません。ですから、その話をきいても、じょうだんだらうと言つて、とり上げませんでした。しかし、そばにゐあはせた人たちは、だつて、もしほんとうに蛇がゐたらどうします、だれか喰くひつかれでもしたら、あとで悔んでも追ツつかないでせう、ともかく、その男に一おう見ておもらひなさいと、しきりにさう

言ひました。

それでデラポールトもその人たちにたいして、仕方なしに、ケリムをよび入れました。

はいつて来たのは、ぶくくした黒服に青いづきんをかぶつた、五十ぐらゐの年ばいの、どことなく威げんのある、しごくまじめさうな男でした。ケリムはデラポールトのまへに出て来ると、胸の上に手の平をくみあはせて、ていねいにおじぎをしました。デラポールトは土地の人とかはらなくくらゐ上手にアラビヤ語を話しました。

「いらつしやい。何だかこの家うちの中に毒蛇があるといふことだがほんとうですかね。」と聞きますとケリムはくびをかしげて、し

ばらくくんく鼻をならした後、

「はい、をりますです。」と、しづんだ調子で言ひました。

「へえ？ 毒蛇が？」

「はい。」とケリムは、ふたゝび鼻をくんく言はせて、

「だいぶあるやうです。少くとも六ぴきはをりますでせう。」

「ほゝう？ ではつかまへてくれますか。」

「はい。私がよびますと、わけなく出てまゐります。」

「ふゝん？ では、さつそくよび出して見て下さい。」

「はいく。」とケリムはおじぎをして、ちよつとその部屋を出ていったと思ひますと、間もなく仲間のものを三人つれてはいつて来て、四人で床の上にあぐらをかきました。そのうちに、ケリ



ムのほかの三人はタンブーリンをひぎの上におき、れいの薄荷のやうなほひの出る薬の草を口にふくんで、

「アラー、くく、くく。」と、さけびながら、ふうく煙をふきはじめました。ケリムはその間、シツくシツと口笛をならすやうな音を立て、蛇をよびつゞけました。四人は四五分間もそれをつづけてゐましたが、蛇はてんで出て来さうにもありません。

デラポールトは、何をするんだいと、半分はばかにしながら、なほすこしの間がまんして見てゐますと、間もなく、いくつものさそりがぞろぞろと部屋の壁の上や、いすの下からはひ出して来ました。デラポールトはそれを見ると、

「あッ。」と言つて立ちすくみました。と、まだく出ます。こ

んどは窓の日よけや、デラポールのベッドの上の蚊帳なぞをつたはつて下りて来ます。すべてゞ二十ぴき以上もゐるでせう。それがみんな、のそくく走つて、ケリムのひぎのところへあつまりました。ケリムはそれを両手ですくひ上げては、羊の皮の袋の中へおし入れくくしました。そして、

「どうぞです。」と、いふやうに、デラポールの顔を見上げました。

「なるほど。しかしそれはみんなさそりばかりで蛇は一ぴきもゐないぢやないか。」とデラポールは言ひました。

「いえ、蛇もをります。」

ケリムはかう言ひながら、こんどは、先<sup>せん</sup>とはちがつた音色でシ

ツ／＼とよびたてました。同時に、三人のものは、アラ／＼と烟をはきながら、タンブーリンをチャリン／＼ポン／＼ならしました。

すると、間もなく、デラポールトの寢床のあたりから、ケリムのあいづと同じやうに、シツ／＼といふ声が出しました。と思ふと長さ四尺以上もある蛇が、によりと寢床の下から出て来て、するすると、ケリムの方へ走りよつて来ました。よく見るとその蛇は、アラビヤ人がタボリツクと言つてゐる、コブラ・カベラといふ毒蛇です。ケリムは、そのおそろしい蛇をむぞうさにつかまへて、袋の中へおしこまうとしました。

「おい、ちよつと待つた。」とデラポールトはさへぎりとめまし

た。

「何でございます。」

「はッは、その蛇はほんとにこの家うちにゐたのかい。」

「ごらんのとほりです。」

「よろしい。ほんとに私わたしのうちうちにゐたものならば私のものだ。そ

の蛇はおまいの袋なぞへ入れないで、こつちへおくれ。」と、デ

ラポールトは、そばの棚たなの上から、口の大きな、びんをとり下おろし

ました。中にはアルコールがはいつてゐます。言ふまでもなく、

動物の標本のびんで、とき／＼漁師たちが、ナイル河からき

たいな魚をとつてもつて来るのをに入れるために用意してあつたの

です。

「ぎ、この中へ入れてくれ。」

「それは、しかし……」

わたしうち

「何がそれはしかしだ。私の家の中わたしうちにゐたものなら、どこまでも私のものぢやないか。おまいにはとにかく三十ピアスターのお金を上げるから、蛇だけはだまつてこの中へお入れなさい。それをぐづくお言ひだと、へんなことになつてしまふよ。そのわけを話さうかね。」

ケリムは、かう言はれて、しづくとその蛇をびんの中へ入れこみました。デラポールトは、手早くそれへキルクの口をして、その上をくるくるとかたくしぼりつけてしまひました。

「もうゐませんか。」

「まだをります。」

ケリムは、最初六ひきはたしかにみると言つた手まへ上、そのまゝ引つこんでしまふわけにはいきません。それでまたすぐに、ポン／＼チャリン／＼、シツ／＼と、よび声やタンブーリンの音を立てゝ、つぎの蛇をよびました。

するとこんどは前のよりは少し小さな蛇が、ひきだし台の下からのそ／＼はひ出して、ケリムのそばへ走つて来ました。

デラポールトは、またすぐにそれをほかのびんに入れさせて口をしました。

「さあ、これで二ひきになつた。もうゐないかい？」と聞くきますと、ケリムは、しぶりきつた顔をしながら、

「この部屋にはもうをりません。」

「では、どこにゐる？」

ケリムは、つぎの応接間の方を向いて、

「あすこに一びきゐるやうなほひがします。」

「ぢや、いつて見よう。」

デラポールトは、つぎの大きなびんを二つ両わきにかゝへ、小使にも二つもたせて、どん／＼応接間へはいつていきました。ケリムはこまり切つたやうな顔をしながら、その部屋からも一びきよび出しました。その蛇は音楽ずきの蛇だと見えて、ピアノの下から出て来ました。デラポールトはようし、と言ひながら、ケリムがいやさうな顔をするのもかまはず、さつさとびんの中へ入れ

させました。

「これで三びきだね。あともう三びきはどこにある？ え、おい

」。

「あとはおだいどころにをります。」と、ケリムは泣き出しさうな顔をして言ひました。

「さあ、いかう。」とテラポールトは先に立つていきました。ケリムは、またそこでしぶくと、れいのおひづをしました。すると、大きな水をけの下から一びきはひ出しました。

「ようし、よし。さ、この中へ入れてくれ。これで四びきだ。さあ、あと二びきを早くお出し。これく小使、つぎのびんの口をあけておけ。」



ケリムはどうくこまつて、思はず、

「エンタ、タフエツスド、セナー。」とさげびました。それはアラビヤ語で、「ほんとに、ひどい、人いぢめだ。」といふ意味でした。ケリムは、この上、ていさいを作りとほさうとすれば、あとの二ひきの蛇も、みんなデラポールトにとられてしまふので、「どうぞ、もう、あとはお許し下さいまし。」と、とうく本音をはきました。デラポールトは、くすくす笑ひました。でも、あまりかはいさうなので、あとの二ひきはかへしてやり、その上、三十枚の銀貨をくれておひ出しました。ケリムは、そのお金を、引つたくるやうにしてポケットへ入れて、

「ちよツ。あのよくなれた蛇四ひきを三十ピアスターでとられち

や合はないや。「と、うらめしさをぶつ／＼言ひ／＼出ていき  
ました。

# 青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第一〇巻」ほるぷ出版

1978（昭和53）年11月30日初刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第六巻」文泉堂書店

1975（昭和50）年9月

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1923（大正12）年7月

入力：tatsuki

校正：林 幸雄

2007年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 蛇つかひ

鈴木三重吉

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>